

## 第一回仏教図書館協会研修会

## 和漢仏書の特質 〈講義I〉

横田 恵（図書館課・参考）

今会の趣旨は、仏書を扱える人材を養成するということで、その第1回目、初歩、入門という意味合いが強いということでしたので、何か話をすればよいと思っておったわけですが、手許のレジメをみて、「これは、弱ったなあ」と思ったんですが、本日ご参加の方々の名簿をみておりますと、かなり経験年数の豊富な方もいらっしゃいますし、また二、三お名前を存じている方も、非常に仏書には造詣の深い方がいらっしゃいますので、「これはいい加減なことはいえないな」と思っております。さらに加えて、レジメの方を見てみると、第2講目の平塚先生のお話と非常に重複するところが多いようで、相前後いたしておりますので、前の方の大蔵經の成立については、殆ど割愛させていただいて、後半の方の話をしようと覚悟を決めました。それから、日程表に実習を含むように書いてございますが、特に実習、演習というものはございません。隣の会議室に大蔵經を始め図書館から貴重書を展示しておりますので、それを見ていただくことを、実習に代えるような形で、展観を見ていただいたら結構かと思います。

我々というか、仏教の側から申しますと、内典、外典という言葉を使います。仏教関係の典籍を内典といいます。仏教以外のものを外典といっているわけですが、外典は、例えばインドにおいてはバラモン教の四ヴェーダ、4種類のヴェーダなんかですが、中国で申しますと儒教とか道教、老荘儒墨などいわゆる諸子百家の書物、そういうものが仏教から申しますと外典であります。内典は仏教の典籍の全体、総称した言葉ですので、中国の（このレジメにも書いてございますが）唐の

道宣の『大唐内典録』とか、あるいは日本でも、東大寺の凝然に『内典塵露章』という書物がありますように、書名の中にも内典という言葉が使われることがわりとあります。そういう内典、仏教の文献というものは、基本的には「経」「律」「論」の3つに分類されます。（レジメの2ページにその辺のことは書いておきましたが）仏陀の教説、あるいは教説とされるものを記したものが「経」でありますし、僧伽の集団生活を営む上での僧侶の生活基準を律したもの、個人の行為を規制した禁止条項とか、あるいは僧伽の集団の運営規則というものが「律」でありますが、それから経を注釈・解釈したものが「論」でありますが、その3つに大別されます。そういうものをを集め集大成した形が、それぞれ「経蔵」、「律蔵」、「論蔵」と呼ばれるものになります。それを合わせて「三蔵」という言い方をしますが、ゾウ、漢字では蔵という字を充てておりますが、サンスクリットではピタカであります。ピタカは籠、容れ物、容器といったような意味であります、ここでは単に容れ物だけではなくて、そこに入れられる、収められた内容そのものをも総括してピタカ、蔵と漢字では訳しておりますが、ピタカと呼んでおります。トゥリ・ピタカ、三蔵ですね、それらは、論蔵の成立は経蔵、律蔵に比べて少し遅いですが、いわゆる原始仏教、南方仏教において三蔵という形がつくられてきます。「大蔵經」という呼び方を中国ではするわけですが、三蔵に含まれる経典類が中国に伝わって翻訳されていく。中国では、「一切經」とか「大蔵經」とかいう呼び方をいたします。ところが三蔵と申しましても、実際に

は三蔵に収まり切れないものもあったようでありまして、四蔵とか五蔵とかに分別する人達もあったようあります。ゾウゾウというのでしょうか、ザツゾウ(=雜藏)ですね、三蔵プラス雜藏で四蔵という考え方もありますし、大乗經典というものが進みまして、密教関係のものも入ってくる関係で、呪文の呪、呪藏とか禁呪藏とかいうのを含める、あるいは、大乗のものを集めて菩薩藏といいい方をして、いろいろ四蔵とか五蔵とかの数え方を考える人達もあったようあります。原始仏教の經典はパーリ語三蔵という形で伝わっておりますが、これには大乗經典は含まれておりません。チベット語に訳されたものがチベット大藏經、中国に渡って漢語に訳されたものは漢訳大藏經、チベット大藏經を基にして、モンゴル、蒙古語にも訳されておりまし、満州語にも訳されております。中国の端に栄えました西夏という国がありますが、西夏語にも訳された大藏經がございます。漢訳大藏經は漢字文化圏の朝鮮にも渡っておりまし、日本にもそのまま渡ってきておりまして、我々漢字を使うものにとっては、漢訳大藏經が一番身近に親しみやすいものであります。漢訳大藏經の中でも、後の講義にもありますが、中国で大藏經というものが印刷されて、宋の時代から大藏經がしばしば印刷されます。日本でも、江戸時代に天海というお坊さんが出まして、いわゆる『天海版大藏經』と、日本での大藏經の完成した最初のものですが、そういうものがございます。近代になって『大正新脩大藏經』というものが印刷されまして、これが現在一番我々が使い易い、身近に使っている、日常使っている大藏經であります、その構成という形で各部を見てみます。

阿含部	本縁部	般若部	法華部
華嚴部	宝積部	涅槃部	大集部
經集部	密教部	律部	釈經論部
毘曇部	中觀部	瑜伽部	論集部
經疏部	律疏部	論疏部	諸宗部
史伝部	事彙部	外教部	目錄部
統經疏部	統律疏部	統論疏部	統諸宗部
悉曇部	古逸部	疑似部	図像部
別巻・昭和法寶総目録			

『大正新脩大藏經』の構成を見ながら、漢訳經典の話を進めていきたいと思います。

『大正新脩大藏經』は、先程、木村館長のお話にありました渡辺海旭という人や高楠順次郎らが中心となって、大正13年から刊行が始まられた日本での大藏經であります、中国でそれまでにありました目録類に見られる漢訳大藏經の分け方と少し違った形で、經典の歴史的な発展の順序なんかを加味した形で、内容に基づく新しい分類で、それを順序立てておられるかと思います。古い大藏經は一番最初が「大般若波羅蜜多經」であります。般若部のものが最初にきておりますが、『大正新脩大藏經』では阿含部、本縁部とあって、原始仏教の四阿含、仏陀の生涯、仏が過去永劫に種々の生を受け菩薩道を行ぜられた故事に基づく本生譚、そういうものを説いたものが本縁部にあたりますが、そういう原始仏教関係のものが最初にきております。それから般若部、法華部等になるわけですが、般若とは「智慧」と訳したら分かり易いかと思いますが、般若に属する部類の經「大般若波羅蜜多經」及びその別出經典、並びに分かれてきた支派の經典、そういうものが含まれた般若部、それから法華に属する部類、「妙法蓮華經」及びその別出經典、並びに支派の經を集めた法華部、華嚴に属する部類、「大方廣佛華嚴經」及びその別出經典、並びに支派の經を集めた華嚴部、さらには、菩薩の修行や授記に関する49の独立の經典を集めて、宝の集積になぞらえて「大宝積經」と名付けられる宝積に関する宝積部、「大般涅槃經」「大般泥洹經」等涅槃に属する部類の涅槃部、「大方等大集經」等を收める大集部と続きます。この般若、華嚴、宝積、涅槃、大集といったものが、いわゆる「五大部」と言われるもので、大乗經典中における五種の大部の經を分別した中国の唐の智昇の『開元錄』に基づいた五大部という考え方であります、後には、先程の木村館長の話にも出てきましたが、天台智顥の「五時八教」という教判に基づいた「法華經」を最勝の教えとして位置付けるための教義体系が確立して、法華というものが重視されますと、華嚴、方等、般若、法華、涅槃という「五大部」の考え方も生まれてお

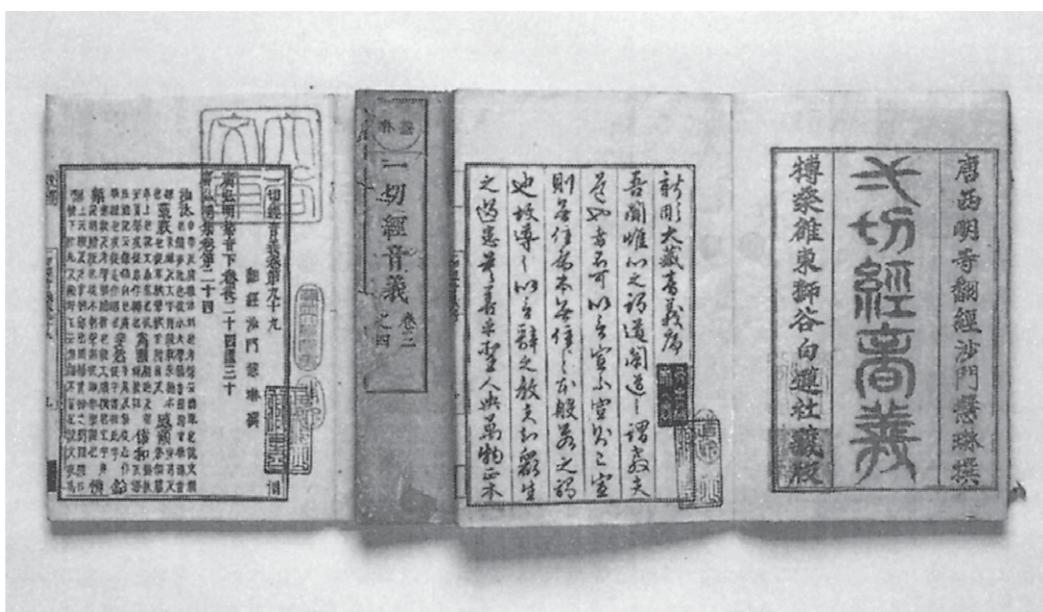
ります。そういうものを加味した形で、『大正新脩大藏經』では般若部、法華部、華嚴部、宝積部、涅槃部、大集部、經集部、そういうふうに並べております。それから、中国での訳經事業、訳經史の上からは後期になります7世紀以後、密教関係の經典が不空らによって訳されておりますが、密教の「大日經」とか、「理趣經」とか、「金剛頂經」、そういういた密教の後期大乘經典を集めたものが密教部であります。そこまでが經でありますが、それから律部、律部は先程いいましたように、教團（＝僧伽）の運営規律、比丘・比丘尼の行為を規定する規則、教團内部の戒律等で、原始佛教、南方佛教の方では戒律を厳重に守っておりますが、大乘佛教が伝わってからは殆ど新しいものが整っておりますので、漢訳ではそれほど量は多くございません。それから釈經論部といいるのは、インドの修行者である菩薩、龍樹とか天親、無着とかの菩薩、それぞれ龍樹菩薩とか天親菩薩とかいっておりますが、そういう人たちの經に対する解釈、注釈の書物、これが釈經論部というものです。それから毘曇部も同じようなインドの尊者たちの論書、中觀部、瑜伽部、論集部、それもインドの尊者の著作、三論學派とか、瑜伽行派とか、各部派の論書等が含まれております。論集部までがインドで撰述されたもの、いわゆるインド撰述といいい方をしておりますが、そういうものであります。それから、そのあと経疏部、律疏部、論疏部、これが中国撰述といふにいっております。佛教が中国に伝わってから、中国人が、中国の坊さんたちが經、律、論書に対して注釈や解釈を加えたもの、そういうものが収録されております。それから佛教が中国へ入ってきますと、それぞれ經典を解釈した人、論述を加えた人、そういうものを論じた人、その人のそういういた説を奉じた人々、そういうグループ的なものを生じてきますと、いわゆる宗、何々宗という宗ですが、宗派が生まれてきます。そういう宗派、諸宗の人々の書物が諸宗部に入っております。それから史伝部、事彙部、外教部、目録部と続くわけですが、『大正新脩大藏經』は全部で100巻ございますが、インド撰述部、中国撰述部と合せまして、こ

の目録部までで55巻あります。第56巻以降が日本人の撰述になる部分であります。今までの中国で編纂された漢訳大藏經ですと、インド撰述、中国撰述が主であって、勿論日本人の著作は含まれておりません。『大正新脩大藏經』では、日本に佛教が入ってから日本人の坊さんたちの著した著作を多数含めて大藏經として刊行しております。それも1つの特徴であります。第56巻以後29巻分、第84巻までが日本撰述部であります。その分が、統經疏部、統律疏部、統論疏部、統諸宗部、悉曇部に相当するところであります。それから、今世紀の初めに中国敦煌から写經・文書の類が多量に発掘されております。いわゆる敦煌文書とか敦煌遺書とか、あるいは敦煌写經とかいっておりますが、そういうものの佛教関係の散佚した典籍、偽經などの写本類が発見されて、古逸部・疑似部というところに1巻かためて収められております。これで85巻。普通『大正藏經』は85巻といふにも申しますが、さらにそれに図像部というものが12巻ついております。これは、いわゆる仏・菩薩の像を表した図像に関するものを集大成しておりますが、12巻。それが加わって97巻になりますが、それに付録の形、続刊の形で、別巻として『昭和法寶総目録』3巻が出ます。大正13年に始まった『大正藏經』も、この時は年号が変わって昭和になっておりますので、『昭和法寶総目録』といふに昭和の年号を冠しているわけですが、『大正新脩大藏經』の一部に数えられている別巻であります。この目録3巻を加えて、『大正藏經』は全100巻です。そこには、各版の大藏經の目録とか、あるいはいろんな寺院の所蔵經典目録等、日本での大藏經に関する佛教目録を多数収録いたしておりますので、これを見ますと大体どんな大藏經がどこに所蔵されたかということが窺えます。

先程のお話にありましたように、佛教が中国に伝わり、サンスクリットあるいは周辺の国々の言葉になっておったテキスト、それは書いたものでなくて頭の中に収まって伝えられたものもありますが、梵本とか胡本とかいう言葉が佛教史の書物なんかを見られた時に出てくるかと思いますが、サンスクリット

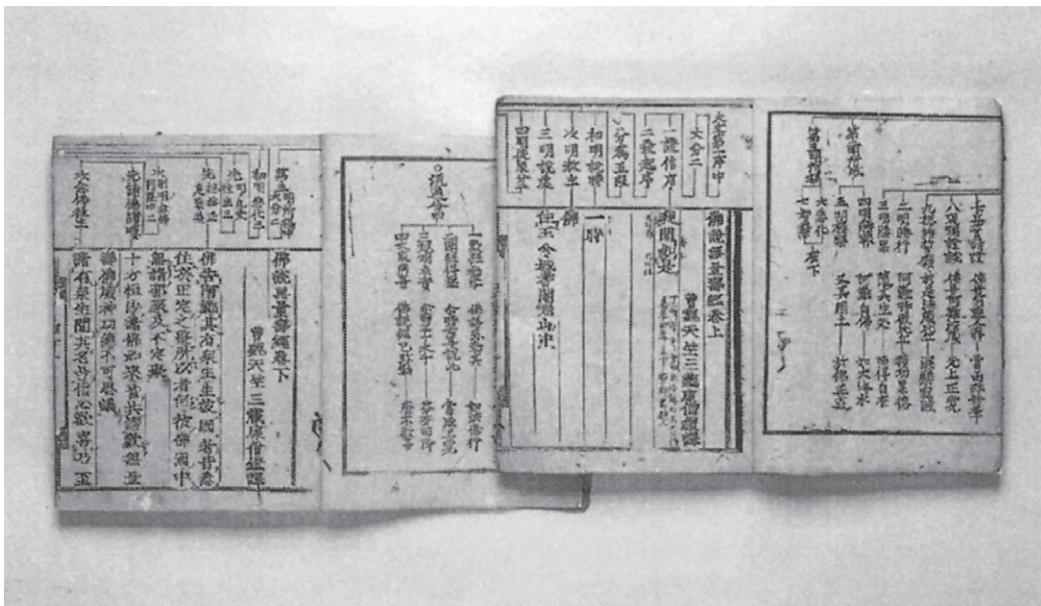
原本、それから周辺の国々の、いわゆる胡国の言葉、言語で撰述筆写したテキストがありました。訳経者の非常な努力によって、多数の經典が漢訳されます。後漢の時代から元の時代までおよそ1000年余の訳經事業が続いておりますが、いろんな原本から訳された、あるいは胡語には通じているが中国の言語にはあまり通じていない人、中国語は勿論中国人の人で達者だけれど、胡国語にはあまり通じていない訳者などということもあります。あるいは伝わってきたテキストが色々違う、訳語の不統一とか、誤った写本、誤訳的なものが生じてきたりして、不統一な面も多々あったことであります。また、仏教の經典というのは忠実に伝わってきても、その意味が判らないともうひとつなんですが、私も寺の者ですが、檀家へお参りにいって漢訳の仏典を棒読みにいたしますから、一般の人には何が何だか判らないということがあります。不幸なのでしょうね、日本が漢字を使っておったものですから、そのまま入ってきた漢訳經典を受け入れてしまった。日本が漢字を使っておらなければ、インドの經典が中国に伝わって漢訳されたように、日本でも日本語訳されて、今的一般の人々には非常に判り易い經典にな

ったかも知れませんが、漢訳經典をそのまま受け入れてしまった。中国でも、ただ読むだけでその意味が詳しく判らないと、正確にその仏教經典を受け入れたことにはなりませんので、音義と、仏典をよむための辞書のようなものですが、音義というものが編纂されます。音義は何も仏教に限ったことではないので、難解な漢字の字形、字音(=発音)、字義(=意味)ですね、字の形や読み方、意味等を解明した典籍が音義と呼ばれるのですが、仏教に限らずに中国の史書や經書、そういうものに関する音義類は早く作られておりますが、やがてそれが、仏典の解説にも適用される形になったわけで、南北朝の時代に『十四音訓叙』とか『一切經音義』とか、そういう名前の書物が作られたというふうに記録されておりますが、この時代のものは現存はしておりません。現存する音義書では、唐代に玄応の『一切經音義』というものが25巻作られておりまし、さらに同じ唐代に慧琳という人が100巻に及ぶ『一切經音義』というものを作っております。どちらも『一切經音義』ですので、区別するために、「玄応音義」「慧琳音義」というふうに略称しておりますが、仏典を読むための音義書がございま



唐・慧琳撰『一切經音義』(和刻本)

## 『科文佛説無量寿經』(日本・木活字印本)



す。宋代には、さらに『統一切經音義』というものが10巻、希麟という人によって編輯されておりますが、中国に倣って日本でも『大般若經音義』『法華經音義』など各種の音義類が作られております。それから10世紀の初め頃には、梵語と訳語の統一をめざす関係上、訳語の統一とか綴り字、音写の部分が多いわけですからどういう字を充てるかということもあります。綴り字の問題も含めて、中国における經典翻訳のための梵語辞典の如き書物も作られており、そうしたものを受け、大成した形で宋代には『翻訳名義集』といったものが編輯されております。仏典翻訳のための梵語辞書、手引書みたいなものですね。それから、仏典は膨大な数が中国に伝わっておりますんで、唐の經典目録であります『開元釈教錄』にはおよそ1000部以上、1076部、5048巻の經典類が記録されているわけですが、俗に仏典5000巻と呼ばれている根拠というか、源というか、『開元錄』のそれが大藏經の經典数のひとつの基準巻数みたいになっておりますが、こういう膨大な經典類を内容的に仕分けしたような形、いわゆる類書、百科事典的なものも作られてきます。それが『經律異相』とか『法苑珠林』とか呼ばれるものであ

ります。梁の時代に宝唱らが『經律異相』というものを50巻編撰しておりますし、また唐の時代には道世という人が『諸經要集』20巻を編輯し、さらにそれに大幅に増補改訂を加えて『法苑珠林』(仏教ではホウエンジュリンではなくてホウォンジュリンといいますが、) 100巻というものを作っております。また、そういう仏教全般ではなくて、ある用途に応じたもの、簡便なもの、たとえば『釈氏要覽』とか『大宋僧史略』といった便覧的なものも作られておりますが、そういう、「事柄を集めた」という意味で、『大正藏經』では第53巻と第54巻になりますが、事彙部というところにそういうものが収められております。

そういうものが整います以前から經典類の解釈、注釈、そういうものは行われているわけですが、通例的にはお經は3つの段階から成り立っている。いわゆる序分、正宗分、流通分、この3つの部分に分かれているのが普通の形です。そういう段階を分けますとのを、科段というふうに申しております。あるいは、分科ともいいますが、序分は最初の部分、普通のお經ですと「如是我聞」という言葉から始まりますが、何処で、誰に聞かせるために、

あるいは、誰の所望によって、これこれ、こういうふうに説く、聴衆はこれだけあった。場所と、その経が説かれるに至った由来、因縁を述べた最初の部分であります。正宗分が本論ですね。その經典の中心となる教説を述べた部分。最後が流通分になりますが、その經の功德を讃嘆する形で、人々に伝えて行く、流布することを希って後世での普及・流通を勧めるという形でお經が結ばれていくわけで、大体流通分が最後にあたりますが、このように三段階に分けて理解するのが普通であります。ところが、三段階でなくてさらに細かく分けて解釈するということも進んでまいりますので、そういう分科すること、分科したことなどがどういうこと、ここはどういうことを説いているか、その内容を標示した言葉を付けたりします。それを科文というふうにいいますが、後にはそれが却って細かく分けすぎて、却って煩雑となり、文意が判らなくなってしまうという状況も生じるわけですが、分科・科文は4世紀、道安の頃から起り、南朝の齊・梁の時期に確立するのであります。それから、科段に分けるだけでなく、内容についてもっと詳しく註釈する、あるいは

は解釈する、そういうことが出来るわけですが、そういう形式といいますか解釈は、書名によってかなり窺えます。「何々玄義」とか「何々義疏」とかいう言葉が付いているものがしばしばあるかと思いますが、玄というのは奥深いという意味であります。玄義とかが付いているのは、その經全体を捉えて大要を述べるという形の解釈ですね。その經典の概論だと、全体を把握した註釈書、特に天台宗なんかでは、色々な經典を解釈する際に、それに先立って経題の意味や、その經の要旨を論釈するのを玄義といとしたわけで、現在では智顗の『法華玄義』とか『金光明玄義』とか、玄義と名の付くものは沢山あるわけですが、その經全体の要旨を述べたものですね。玄義とか玄論・玄談とかいう語を書名に使います。ショ(=疏)という語もよく使いますが、大体は外典の方では註に対する註がソ(=疏)と呼ばれるのですが、漢籍の方ではソと読みますし、仏教の方ではショと読みますが、『法華義疏』とか、日本では聖徳太子の『勝鬘經義疏』とかございます。疏の語義は、疏通といいますが滞りを除いて通じさせることですが、先程の専ら經論の大意を論



『和字繪入往生要集』

じた註釈書である玄義、玄論とか章、義章と違いまして、さらに丁寧に經論の本文のそれぞれの章句について、ひとつひとつ註釈を施す形が疏であります。また宗派の確立した唐中期以降には、日本でもそうですが、各宗派の祖師が著したもの、あるいはその人たちが拵り処としている書物の疏をさらに註釈したものも末疏と呼んでおりますが、盛んに作られました。そういうふうになりますと、註釈書、末疏の類は非常に数が多くなってきます。

そういう中味の話でなくて、仏書に見られる刊行形式といいますか、実際に見られる仏書の形態を見てみると、經の本文に科文が加えてあるもの、あるいは註を合した合註本、本文とは別に用いられているいろんな註釈書を集めて、テキスト本文の各文節ごとに合わせて併記し、一本としたもの、それを会本というのですが、中国宋朝以降の刊行本にこの形式が多く用いられていますし、日本でも『日本大藏經』という大藏經がありますが、それもそれに類した形式といえますし、『佛教大系』という大きな叢書がありますが、それも会本の形をとっていますが、勉学する上では、いろんな種類の註が一所に集まっておりますので、便利な形態であります。単行で出版されます本では本文の頭、上欄にそういう註が書いてあるものがあります。頭註本とか首註本、首書き、頭書き、そういう呼び方もしますし、鼈頭と、難しい字が使ってありますが、鼈とは大きな亀、大きなスッポン、海亀ですが、中国では鼈頭というのは、高等官吏の試験にパスした首席及第者である状元、そういう人を指す言葉ですが、我が国では、書物の上欄に書き入れた註釈、標註、これを鼈頭といいう方もします。それから、仏書が庶民に流布してきますと、漢文のものを日本では和訳した形の本が出てきます。さらに、親しみ易いといいますか、絵巻物、絵伝なんかの流れを汲んでもいるんでしょう、絵を入れた、いわゆる絵入本というのもも出てきます。人々には親しみ易いものですので、我々が使います『往生要集』とか『選択集』とかございますが、それにも『和字絵入往生要集』とか『ひらかな絵入選択集』というようなものも、いろんな版本が沢山出ておりま

す。さらには、語録とか仮名法語、あるいは談義本とか寺社縁起、靈験記、和讚といった仏教文学的なもの、仏画、曼荼羅など仏教美術的なものも含めて、外観的なことから仏書に近づいていただく、あるいは慣れていただく手始めとして和漢仏書の特質といいますか、仏書の諸相をお話するつもりでおりましたが、本題に入る前に時間が過ぎてしまいました。私自身準備不足でもありますし、充分な講義ができませんでしたが、もし今後もこういう機会が与えられますなら、もう少し的を絞った形で、細かい所に実務に役立つような話で、もしある役に立つようなことがあつたら、またお願ひいたしたいと思う次第であります。本日は纏まりのない甚だ雑駁な講義で、尻切れトンボに終わってしまいましたが、どうかお許しください。どうも失礼しました。

## 訂正とお詫び

本文中に以下の誤りがありましたので、訂正いたしますとともに、お詫び申しあげます。

頁・行	誤	正
P13 左19~20	正宗分、通流分	→ 正宗分、流通分
P14 左6	最後が通流分	→ 最後が流通分
P14 左10	大体通流分	→ 大体流通分